

言語形象と意味

河原修一
(国文教室)

Language Formation and Meaning

Shuuichi Kawahara

キーワード：状況、心象、言語心象、内言、外言

1. 言語現象の見えかた

言語という現象は、言語観察の視点によって、見えかたが違う。言語現象の見えかたとして、三つのレベルが考えられる(図1参照)。

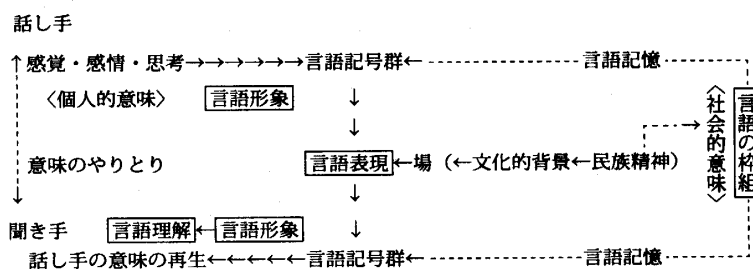
①話し手(書き手)・聞き手(読み手)のこのころのなかの言語形象
～感情・思考の言語化へのプロセス

②社会的な共通理解としての言語記号体系
(語彙体系、連語体系、文法体系、レトリック体系)
～各個人に共通して内在する枠組

③具体的な場における言語活動(言語表現・言語理解)
～言語記号表示と場(脈絡・状況)の相互作用

ここでは、①のうちの話し手(書き手)となるべき人(主体)のこのころのなかの言語形象と意味について、考えてみる。

図1



2. 意味

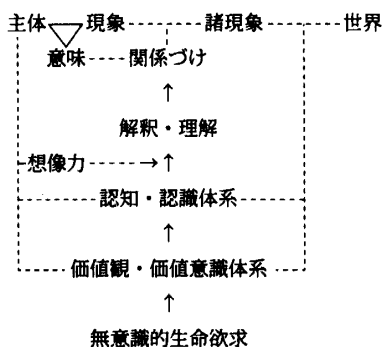
意味とは、主体の関係づけによる現象(あらわれたかたち)の措定(関係のなかにおきさだめること)である。主体の前にあらわれたかたち(現象)によって示されるものである。示すもの(現象)があり、示されるもの(意味)がある。

意味は、何が示されるかという解釈、理解(その場での理解、様々な場を通じた合意・約束・規則、様々な場を越えた洞察)によって成り立つ。解釈・理解は、想像力を媒介として、認知・認識の体系および価値観・

価値意識の体系に基づいている。解釈・理解によって関係づける主体は、人間（個人または集団）である。

個人によって関係づけられる個人的意味（ものごとへのおもい）を、集団によって関係づけられる社会的意味（慣用による記号的意味）によって表現し、他者に伝達しようとする。個人的意味と社会的意味とは必ずしも一致しない。言語形象に際して、両者の一致不一致を照合して、おおよそ一致するものを選ぶ。

図 2

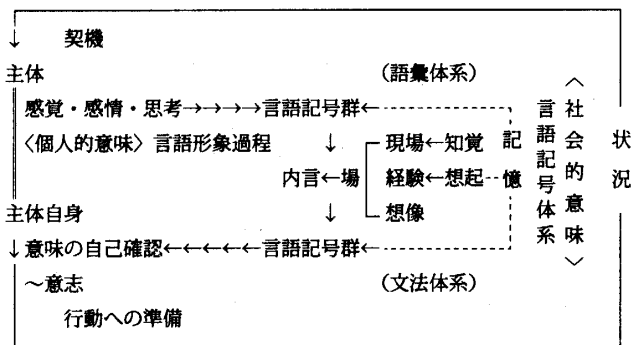


3. 状況

状況とは、主体自身を含む環境における諸関係の総体である。状況は刻々と変化する。

図 1 で、主体が聞き手および場をほとんど意識しないとき、状況に応じて、主体が意識内でもかたちづくる言語形象は主体自身に向けられ、自己確認され、行動への準備となる。言語形象過程の結果（実現形）としての内的言語形象（内言）がある（図 3 参照）。

図 3



言語形象過程で、主体の感覚・感情・非言語的思考は、語彙体系に媒介されて、社会的に意味づけら

れた言語記号群に変換される。言語記号群は、連語体系および文法体系に媒介されて（レトリック体系が関わることもある）、内的言語形象（内言）として、構成される。

状況の変化を契機とする主体の言語形象活動は、状況への働きかけという行動への動機（行動しないという判断も含む）として、フィードバックされる。主体は、言語の論理（ロゴス）的側面と感性（パトス）的側面とを媒介として、状況と関わる。

4. 言語の枠組

言語形象に際して、各個人は意識内にいわば分類語彙表を具備して、参照する。その分類語彙表は、社会的通念（常識）によって輪郭づけられるが、各個人の経験の総体に基づく認知体系さらには価値観の体系によって、揺れ（ずれ）が生じる。

語彙として、心情（感覚・感情・気分など）を表すことばと、事物（人を含む）を表すことばがある。心情と事物を併せて表すことばもある。各個人は、意識内に感覚語彙、感情語彙、事物語彙などを内在させる。

言語形象に際して、各個人はまた意識内にいわば語用辞典および文法書を具備して、参照する。語用辞典によって、連語の慣用に従う。文法書によって、心情や事物の概念群を論理的に構成して、認知あるいは認識を表す。

主体が社会的通念による輪郭づけで個人的意味を表しきれないとき、文法体系は基本的な枠組として変えられないが、レトリック体系によって連語体系をずらして、新しい認識を示すこともある。

5. 心象

こころとは、意識のあらわれる場（おもいの生じてかたまりまた消える場）である。こころは主体にとって自覚されるが、主体にも他者にも空間的には知覚されない。こころは、現在のものごとを映し出し、おもいをあらわすだけでなく、記憶や想像によって、過去や未来のものごとやおもいをもあらわす。こころはいわば生命活動としての時間のなかに存在する。

意識は、こころのはたらきのあらわれ（スクリー

2) である。

覚醒しているときの意識は明瞭で、気絶したり熟睡したりしているときの意識は昏い。まどろんでいるとき、覚醒時とは異なる意識があらわれてものごとやおもいをあらわし、夢を見る。覚醒時には自覚されない無意識あるいは潜在意識と呼ばれる³⁾(広義の)意識である。前述した昏倒時、昏睡時にも生命活動は続くから、集合的無意識あるいは普遍意識が存在するという考え方もある。

主体が環境(ものごと)にふれて関わる時、こころのなかの意識のうえに、様々なおもいが生じたり消えたりする。環境には、外界・身体におけるものごとと、内面にあらわれるものごととがある。環境は現象(ものごとの変化)として主体の前にあらわれ、相互作用を生じる。主体自身を含めて状況と呼ぶことにする。

感覚・感情・思考・意志などのおもいは、こころのなかであらわれたかたちである。こころのなかのおもいかたちを心象と呼ぶことにする。ここでいうかたち(象)とは、ある空間的な範囲のなかで輪郭をもつかたち(形)だけでなく、限定されないひろがり、輪郭をもたない輝き・響き・感触、時間のなかで輪郭をもつうごきを含む。

人間という主体の生命活動としての心的活動(様々なおもいの総体)があって、外界・身体 of 現象のかたちを主体自身の意識に映じて捉える。つまり、感覚を通して得た形、動き、色、音、触感などの情報をものごととして組み立て、意識ににかたち(象)として映し出し、知覚している。この意識に映じてあらわれたかたち(象)を心的表象(こころにうつされてあらわれるかたち、おもわれるかたち)と呼ぶことにする。和語の「うつされる」には、「移される」「映される」「写される」などの意味を含んでいる。

心的表象は身体性に即しているが、その身体性の機能に応じて、どういう領域の場にうつされるかたちかという違いがある⁵⁾。五感に応じた各領域に心的表象が同時並行的にうつされ、知覚によって統合され、外界・身体 of 現象が認知される。

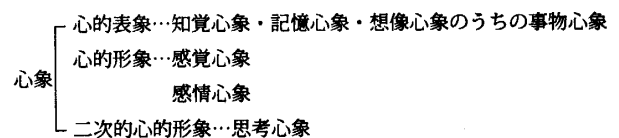
現在の外界・身体から独立して、主体の意識にかたち(象)があらわれるとき、つまり想起や想像などの心

的活動に際して、五感とは別の感覚によって、そのかたち(象)を捉える。この記憶や想像のなかであらわれるものごとが意識に映じたかたち(象)も、心的表象である。外界の現象を五感で捉えるかたちに比べると、輪郭が不鮮明であり、捉えるとき拡散しやすい。

環境の変化に反応して作動する感覚そのものは、身体意識にかたち(象)があらわれる。そのかたち(象)は部分的あるいは全体的なうごき(つらぬき)として自覚されることもある(無自覚的であることが多い)。このこころのなかのうごきは、身体意識という表層にあらわれる。輪郭はほとんどない。主体の意志とは無関係であるこの意識に生じてあらわれるかたち(象)を心的形象(こころにつくられてあらわれるかたち、おもうかたち)と呼ぶことにする。

現在の外界・身体 of 知覚や過去・未来を現在化する記憶・想像に伴って、主体のこころのなかから意識に感情があらわれるとき、そのかたち(象)はうごき(ながれ)として自覚される。つまり、環境の変化に応じて、感覚が作動し、気分(意識の状態)に不均衡が生じるとき、感情が表出する。このこころのなかのうごきは内的になぞって捉えることができるが、輪郭の不明瞭な、或る広がり(塊り)のながれとして、主体の意志とは無関係に生じたり、強まったり、弱まったり、消えたりする。この意識に生じてあらわれるかたち(象)も心的形象(こころにつくられてあらわれるかたち、おもうかたち)である。

図4



さらに、外界・記憶・想像のなかのものごとや感覚・感情などのおもいの心象の群れを組み合わせる(時間性を含めていえば組み立てる)こころのなかのまとまったうごきがあり、思考として自覚される。ただ、このこころのなかのうごきは、それ自体に輪郭はなく、様々な心象群を構成する内的な操作としてのくみだて(瞬時であればくみあわせ)として、自覚される。主体の意志に随って生じたり、強まった

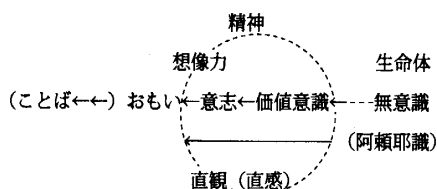
り、弱まったり、消えたりするが、主体の意志によらないで無意識に生じたり、強まったり、弱まったり、消えたりすることもある。この意識に生じてあらわれるかたち(象)は、心的形象ではあるが、いわばかたち(象)のかたち(象)であって、感覚・感情という心的形象とは次元が異なるから、二次的心的形象と呼ぶことにする。

また、主体が自覚しないでうつされ、うみだされる心象を、無意識的心象と呼ぶことにする。

6. 精神

心象を生み出すものは、生命エネルギーとしての心的エネルギーである。生命エネルギーは宇宙エネルギーからのわかれである。様々な心的エネルギーの源泉を精神と呼ぶことにする。精神の中核に、生理的・心理的・精神的な様々な段階の欲求から脱皮しながら展開する意志があり、思考という心象群の組み立てをなす。明確な意志に発現する以前から、生命体としての無意識的な意志があり、感覚や感情という諸心象の生成をなす。無意識的意志を含む意志を支える生理的・心理的・精神的な様々な段階の価値意識がある。価値意識(状況に応じて価値観となる)に支えられた意志を具現するために、精神の操作子(いわば見えざる手)として、想像力があり、心象を生み出し、つくり変え、心象群を組み合わせる。過程を経ないで働く様々な段階の(生命体的直感から精神的直観に至るまでの)直感(直観)がある。

図 5



心象を生み出す精神のかたち(象)はエネルギー形態としてあり、かたち(象)をなしていない。心象におけるかたち(象)とは次元を異にする。かたち(象)をなす以前のかたち(象)である。主体にとっては、想定されるだけで、直接には知覚できない。主体が自覚しないという点では、無意識的心象に類

似する。直感(直観)はひらめきとして、意志は力強い直線的なうごきとして、比喩的に自覚されることはある。

7. 言語心象

無垢の精神で感覚的、行動的、直感的にものごとを捉える乳児期の段階から、記号体系として社会的につくられた言語を習得する幼児期の段階になると、ものごとを複合あるいは擬似的な概念の枠組として捉えるようになる。乳幼児期には、感性和論理が未分化なままに、想像力が自在に展開する。場との関連で言語の使用に習熟する児童期以降の段階に至って、ものごとを社会的に合意された概念の枠組として捉えるようになる。一方では、概念という意味の輪郭だけで捉えて、ものごとの本質を看過することもある。青年期以降の段階で、精神を自覚し、言語の可能性と限界性を認識したうえで、ものごとの本質をことばの象徴的な組合せによって捉えようとすることもある。

外言(ことば)のかたちは、定型的な音や図形である。ことばの受け手がことばのかたちを意識に映じるとき、聴覚像や視覚像としての心的表象となる。像とは、或る広がりをもつものであるが、ここでは、時間のなかに或る広がりをもつものも含めることとする。この心的表象は、社会的な約束によってそれぞれものごとに対応づけられた記号としての機能をもつから、言語心象と呼ぶことにする。ことばの受け手は、社会的な約束の体系としての記号体系(言語の枠組)の記憶によって、言語心象群を組み立て、理解する。

内言(こころのなかのことば)のかたちは、主体の意識に、定型化された聴覚の記憶による再現として、つまり定型的な聴覚心象(聴覚像)としてあらわれる。この聴覚心象は、社会的な約束によってそれぞれものごとに対応づけられた記号としての機能をもつ心的表象であるから、言語心象である。内言をつくる主体は、社会的な約束の体系としての記号体系(言語の枠組)の記憶によって、言語心象群を組み立て、内言を生み出す。この記号体系(言語の枠組)は、もともと言語集団(民族など)の原初的

な思考のあり方（概念体系、カテゴリー体系）に基づいている。

外言の受容や内言の産出に際してあらわれるそれぞれの言語心象は心的表象である。言語心象群の組み立ては、思考心象と同じ次元の心的形象（二次的心的形象）である。

定型的な心象を観念と呼ぶことにする。言語心象は言語観念である。外言の受容に際してあらわれる言語観念は、音韻である。内言の産出に際してあらわれる言語観念は、内的音声である。

一定の論理によって、聴覚心象が定型化される。その論理は、言語の枠組をなす文法体系と語彙体系であり、さらに象徴的な言語形象が試みられるときはレトリック体系が加わる。

8. 非言語心象

心象には、ことばになるかたちとことばにならないかたちとがある。ことばになるかたちがことばになる前のかたち（前言語心象）とことばにならないかたち（超言語心象）とを併せて、非言語心象または一般心象と呼ぶことにする。

ことばにならないかたちは、音や図像、身体の動きなどに具現されることがある。また、ことばにならないかたちを、ことばの象徴的な組合せによってあらわそうとする詩的表現がある。

9. 心的活動

精神のあらわれとしての心的活動（こころのなかのおもい）は、主体にとっての時間のなかで、連続的、重層的、段階的、一体的で、なかなか区分できないが、心象の次元の違いに応じて、大まかに、感覚（領域の違いに応じて視覚、聴覚、嗅覚、味覚、体性感覚）、感情（段階の違いに応じて生理的欲求、心理的情動、精神的情操）、思考（組み立て方の違いに応じて単発型、並列型、直列型、統合型、超越型、象徴型）、直観（段階の違いに応じて原始的直感、精神的直観）に分けることにする⁸⁾。

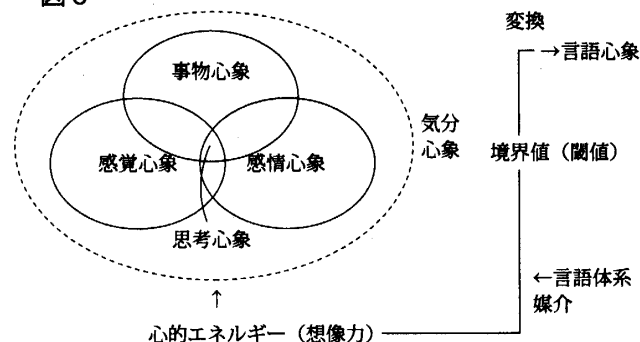
気分は、様々な心的活動の総体としての意識の状態である。想起・想像・夢などにおける感覚器官（身体器官）によらない別の（五感以外の）感覚は、人

間にとって将来的な可能性をもつ。知覚は、広義には思考に含まれる。知覚は、一般的には、感覚による知覚を指す（諸感覚による統合的知覚は認知と呼ばれる）ことが多く、感情による知覚は感情体験、思考による知覚は認識と呼ばれる。想起・想像は、人間が時間という次元を知覚する出発点として精神に関わり、様々な心的活動にまたがる。経験、認識、意志は持続的な心的状態であり、時間の尺度が異なる。経験は記憶（エピソード記憶、情動記憶、手順記憶、記号記憶、自伝的記憶など）の総体である。経験は、主体にとって過去の現在化であり、現在の未来化である。認識は様々な思考の総体であり、主体の価値意識（状況に応じて価値観）に基づく経験の論理的統合である。広義には、直観的認識（洞察）も含まれる。意志は、欲求という初発の段階では感情に関わるが、精神の発現に随って、むしろ思考の総体としての自己認識さらには価値意識に基づくこととなる。

10. 言語形象

主体にとっての時間を⁸⁾截り取る。どの時点を契機として、一般心象は言語心象に変換されるのか。

図6



主体にとって、最も価値のある心象に、生理的・心理的に反応する。心的エネルギー（想像力）が一定の境界値（閾値）を越えるとき、記憶内の言語記号体系が媒介して、一般心象は言語心象に変換されて、主体に自覚され、内言形象への契機となる⁹⁾。

諸感覚（五感）は、主体の意志とは無関係に、生命体無意識によって、同時並行的に（連動して、あるいは無関係に）作動する。作動する領域がそれぞれ異なる。意識のそれぞれの領域で、心的表象が映

じる。主体の直感的な（無意識的記憶と照合した）価値観に応じて、それぞれの心的表象の強弱に違いがある。

諸感覚と同時並行的に（連動して、あるいは無関係に）、別の感覚が生じて、記憶や想像という領域で、心象（心的表象、心的形象）があらわれることもある。

諸感覚や別の感覚のうちの或る（いくつかの）感覚が突出すると、初発の気分（意識の状態）に不均衡を生じて、動機的・欲求的感情が心的形象として生まれる。

諸感覚を統合して、合成された心的表象があらわれ、外界を認知し、現在の感情（心的形象）や過去のエピソード記憶（再現的心的表象）・情動記憶（再現的心的形象）と照合する思考過程が、諸心象の組合せ・組立て（二次的心的形象）として作動して、状況を認知する。思考過程のなかで、判断的感情・意志的感情（心的形象）とともに実現心象（心的表象）が形成され、行動への契機をなす。行動に際しても、判断的感情・意志的感情とともに、実現心象と行動とを照合する思考過程が作動する。行動によって、状況への認識を深め、評価的感情・情緒的感情とともに、反省的思考が作動し、次の行動への（経験と呼ばれる）意識的・無意識的記憶として蓄積される。一連の様々な心的活動の帰結として、初発の気分とは異なる変動後の気分となって、再び意識の状態の平衡（再均衡）を取り戻す（図 7 参照）。

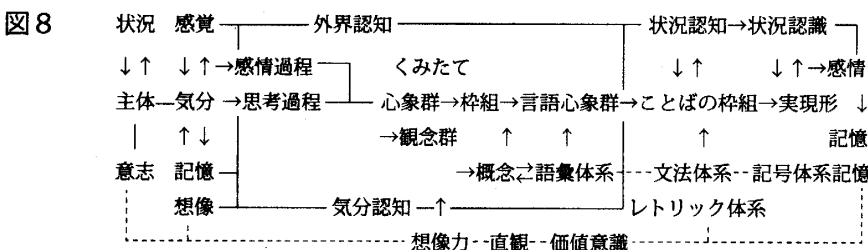
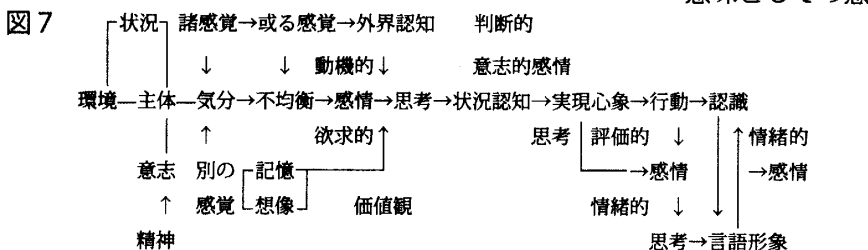
このような時間のなかで、主体の意味（現象の関係づけ）が示され、自ら確認すべきものごとやおもいについて、言語形象が生じる。主体の価値観に応じて、心的過程の或る時点で言語的思考過程が作動し、言語の枠組との照合・選択がなされる。

一般心象が言語心象に変換されるとき、言語論理（命題論理プラス生活経験論理）に基づく言語的思考がはたらく。主体の記号記憶（聴覚観念と概念・固有物との結合についての記憶あるいは語彙体系）と表象すべきものごととの一致不一致を照合して、意識のうえに言語記号を表象する。次に、記号論理記憶（聴覚観念と概念・固有物との結合体の相互関係のあり方についての記憶あるいは文法体系、連語体系）と表象すべき事態との一致不一致を照合して、意識のうえに、言語記号群を配列する。さらに、生活経験記憶および象徴記憶（レトリック体系）と表象すべき状況との一致不一致を照合して、個人的意味と社会的意味とのずれをできるだけ少なくし、場（聞き手を含む）への思考（判断）をも踏まえて、意識のうえで言語記号群の配列を修正する。このようにして、言語心象が形象される。内言あるいは外言に具現される。

概念は、様々な心象の或る共通性を抽象した心象である。社会的に合意されるとき、社会的意味として意味の輪郭を示す。ただし、個人の心象、観念によって示される個人的意味、あるいは個人を超えた象徴的心象、精神的観念によって示される普遍的（本質的）意味としての意味の内実と一致するとは限らない。

言語形象と意味に重点を置いて、簡略なおもいとことばのモデルを考えてみる（図 8 参照）。

このモデルに基づいて、一般心象から言語心象への言語形象の過程と具現について、内言および外言という実現形をもとに、たどってみる。



11. 内言メモ

主体自身が内言を記述した内言メモ（時間・状況を付記した補助メモを含む）を資料とする。

23歳女性Pさん（栃木県足利市出身、米国オレゴン州在住、大学院1年）

- ① 今日から学校かぁ。まだ眠い
1998.8.31 AM 7:00 目覚ましの音とともに
- ② 何着ていこうかな、
1998.8.31 AM 7:20 シャワーを浴びながら
- ③ すっごい混んでる。遅刻しちゃう、
1998.8.31 AM 7:50 交通にまきこまれて..
- ④ 新入生ばかり、
1998.8.31 AM 9:00 授業を終えて
- ⑤ あっ 火事だ!! 近いのかな? 私ガス見てきたっけ?
1998.8.31 PM 5:30 サイレンを聞いて
- ⑥ あっ! 雨。夕立ちかな? 車がきれいになる!!
1998.8.31 PM 6:30 外を見て
- ⑦ この授業長いんだよなあー。
1998.8.31 PM 7:00
- ⑧ 今日、すっごいつかれた
1998.8.31 PM 10:00
- ⑨ カミナリだ。落ちませんように
1998.8.31 PM 10:10 F Wを運転中

P①では、意識にあらわれる心象の群れのうち、焦点とならない心象の群れ（聴覚心象、知覚心象）は時間（意識の流れ）のなかに消えていく（忘れ去られる）（図では*印で示される）。価値意識に基づく（興味・関心のある）焦点となる心象をつらねる（つなげる）（思考（判断）心象、感情（感慨）心象）と、〔今日カラ学校カ〕という直列型（はしより型）の言語心象となり、〔今日から学校かぁ。〕という実現形として、状況が認識される。また、焦点となる心象として気分心象があり、感覚（聴覚）が作動し、感情（不快）が表出し、変動後の気分が〔マダネムイ〕という単発型に近い直列型（飛石型）の言語心象となり、〔まだ眠い〕という実現形として、気分が認知される（図9参照）。

P②では、焦点とならない心象の群れ（行動心象、感覚心象、知覚心象、記憶心象）は時間のなかに消えていく。焦点となる心象をつなげる（思考（比較選択）心象、意志、感情（楽しさ、迷い、期待）心象）と、〔何ヲ着テイコウカナ〕という直列型（連鎖型）の言語心象となり、〔何着ていこうかな〕という実現形として、状況が認識される。シャワーを浴びながら大学キャンパスにいる自分の姿を想像するとき、五感とは別の感覚もはたらいていて、シャワー室の情景と大学キャンパスの情景とが二重写しになって、意識のうえに、知覚心象と想像心象が心的表象として同時並行的に（重層的に）あらわれる。自意識のはたらきによって、「服装A→行動A

→自己像A」として、自己像A, B, C...が比較選択されている。自分らしいファッションと常識との間で、状況（場）を判断しながら、意志のはたらきによって自分らしさを求めようとしている（図10参照）。

以下、P③～⑨については割愛する。

内言は、意識内にあらわれる様々な心象の群れのうち、主体にとって関心のある（価値のある）心象だけが語彙体系に基づいて取捨選択的に言語心象化され、言語心象群を連鎖

図9

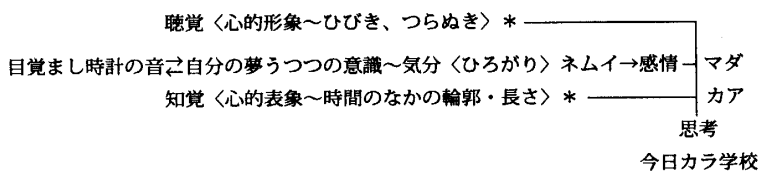
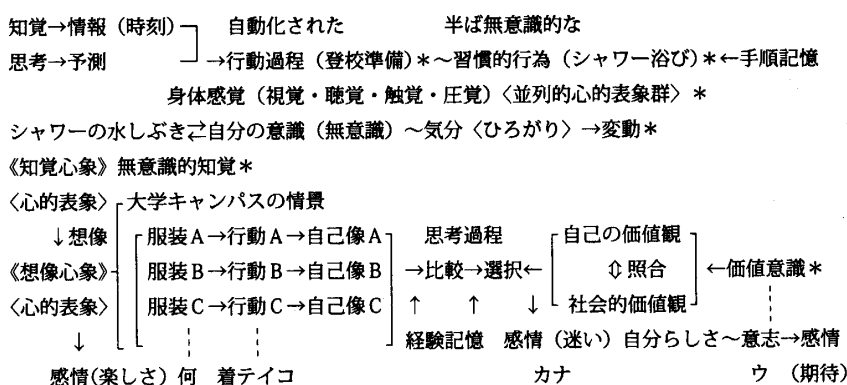


図10



体系、文法体系に基づいて原則として直列的につなげて、言語形象化する。聞き手および場をほとんど意識しないために、言いさしやはしより、助詞の省略などがみられる。

12. 外言

主体自身が独言を記述した独言メモ (時間・状況を付記した補助メモを含む) を資料とする。

14 歳男性 A さん (鳥取県倉吉市、中学 3 年)

1 どっかあそびいきてーなあ

1998.8.25 昼 リビングにいるとき

2 あーねむてー

1998.8.25 夜 部屋にいるとき

3 かいー

1998.8.26 夜 部屋にいるとき

4 きたたねー そうじしよっ

1998.8.27 昼 部屋で

5 背のびたかな

1998.8.28 朝 おばあちゃんの部屋で

6 いいとも見よっかなー

1998.8.28 昼 部屋にいるとき

7 学校たいぎくせー

1998.8.28 夜 部屋にいるとき

8 三十日奉仕作業だっけ?

1998.8.28 夜 部屋にいるとき

9 土曜日だー

1998.8.29 朝 ベットの上で

10 たいぎー、ねむてー、雨ふれコラ

1998.8.30 朝 トイレで

11 始業式か

1998.8.30 夜 トイレで

心理的欲求、気分的感情、感覚、評価、意志などが示される (独言 2 については図 11 参照)。

図 11 外界の暑さ→感覚→気分の変化→眠気
→自覚→詠嘆→感情 (ネムイ)
アア (ネムタイ)
(オオ) ネムテー

独言メモと内言メモの言語的特徴は共通する。聞き手および場をほとんど意識しないために、常体の談話語 (方言、流行語を含む) が用いられる。言語形象の結果が外的音声か内的音声かの違いによる。ただ、独言の方が負の評価・感情に関わることが多く、状況や行動と結びつきやすい。また、内言と独言の分布の割合の違いについては、主体の性別や年齢、性格と関わる。

次に、テレビのトーク番組から起こした会話メモ (括弧内は声の調子、表情、身振りなど) を資料とする。

『あいのり』フジテレビ 2003.5.19 放送

時…春

所…バンクーバー (カナダ) の公園

人…24 歳男性ドボクン (通称)

(群馬県出身、土木作業員)

24 歳女性サキ (通称)

(東京都出身、シュリンプバー勤務)

ドボ①おはよ。

サキ①おはよう。

②私は この旅に来て ドボクンに出会えて 本当
に良かった。

③ドボクンが…大好きだよ、心から。

(ハァー) (溜息)

④だから 一緒に帰ろう。(ハァー)

ドボ②オレ、あいのりに参加して 恋愛ってこんなに
難しいもんだなー もんだ…もんだなーって改
めて思って、でもその中で誰こ、誰かのこ
好きになって その子が違う子としゃべってる
のに嫉妬して、でも 冷静に 真剣に恋愛に向
き合えたと思う。(サキ、涙をふく)

③だから……? (ドボクン、せりふを忘れる)

④オレの夢は、自分…自分…自分で自分の家を
造る。

⑤それを サキにも 手伝ってもらいたい。

⑥オレは サキの全部が好き。

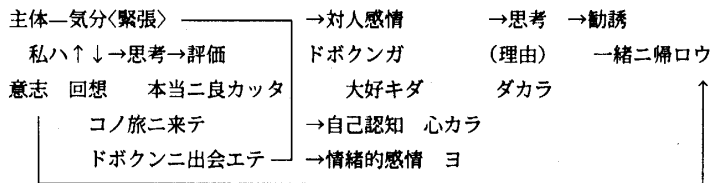
⑦一緒に日本に帰ろう!!

⑧大好きだよ。

サキ⑤ありがとう。

(二人は歩み寄り、抱き合う)

図 12



目がさめて

茶を飲んだ

靴をみがいた

さあ町へ行こう

(岩田宏『三月二十七日朝の日記』部分)

サキ②～④では、愛の告白という状況のもとで緊張した気分にあるが、告白という言語行動の後で緊張緩和の溜息が洩れる。間（ポーズ）に切迫した想いがこめられる。サキ③では、追加することばが、結果的に倒置となっている（図 12 参照）。

ドボ②～④では、愛の告白という状況のもとで緊張した気分があり、吃りや言い間違い、言い忘れなどになって、あらわれる。間（ポーズ）には、相手の反応をみながら自己評価し、その後の発言を修正する思考過程がある。

会話では、聞き手および場が大きく関わる一方で、ことばが時間のなかに消えていくために、反復や追加（結果的に倒置）、省略などが多くみられる。

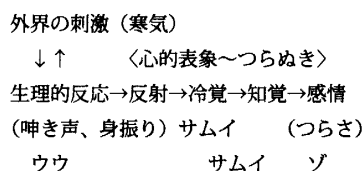
次に、洗練された（虚構の加わった）内言の表現（外言）として、詩の一節を取り上げてみる。

うう
寒い
寒いぞ！

(岩田宏『夜半へ』部分)

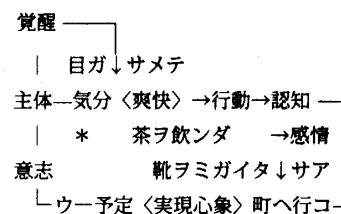
第 1 行は、反射音（表情音）に近い。第 2・3 行の「寒い」は外界・身体の両方を示す。反復は並列的な広がりではなく、時間とともに寒気が身体を貫く直列的な程度の増加を示す。「ぞ」によって、つらさの確かめ・訴えを示す（図 13 参照）。

図 13



時間とともに思考と行動が連動しつつ直列し、実現心象への意志がはたらき、言語形象によって状況が認識される（図 14 参照）。

図 14



外言も、意識内にあらわれる様々な心象の群れのうち、主体にとって関心のある（価値のある）心象だけが語彙体系に基づいて取捨選択的に言語心象化され、言語心象群を連語体系、文法体系に基づいて原則として直列的につなげて、言語形象化する。聞き手および場を意識するために、文としての構造ははっきりあらわれる。文章（ここでは詩）では、ことばが空間的に固定されているために、会話に比べると、反復や追加、省略などは少なくなる。むしろ、反復法や倒置法、省略法などのレトリックとして、意識的に用いられることになる。

13. 結語

外界・身体・内面の現象という状況の変化に対して、主体はどのように対応するか。主体の意識（無意識を含む）に経験的に蓄積された認識体系さらには価値意識体系に基づいて、生理的・心理的・精神的に評価的判断がなされ、こころという内的・時間的な場に、感覚・感情・思考の諸心象がたちあらわれる。心象に示される意味を自己確認して、当面する状況（自己の状況を含む）を認識し、状況への対応としての行動（行動しないことも含む）の準備として、意志を形成する。

意味の自己確認は、こころのなかのことばとして

組み立てられて、明確化して、意志を自覚することとなる。心象は個人的意味が示されるが、言語心象に変換される内的言語形象に際して介在することばの枠組には、社会的意味が示されるから、前者は後者によっていわば自己客観化されることになる。一方、主体はできるだけ個人的意味を表象するために、言語のもつ創造的側面としてのレトリック体系を精神的象徴に用いることもある。状況の認識と内的言語形象とは、双方向的な相互作用がある。

注

- 1) 例えば、「りんごとみかんが好きだ。」という文は文法的にも意味連関的にも正しい。「りんごと野球が好きだ。」という文は文法的には正しいが、意味連関的には不適切である。ただし、「りんごと地球儀が好きだ。」という文が、詩のなかで、一定の脈絡のなかに置かれれば、読み手の解釈によって、意味のある文となる。レトリックとしての隠喩（暗喩）あるいはカテゴリー間転換が用いられていると理解される。しかし、「みかんがりんごと好きだ。」という文は文法的に正しくなく、非文となる。
- 2) 感覚が知覚される過程で、外界の波動を感覚器官で受容し、電気信号と化学信号に相互に変換して神経系を伝わり、網目状をなす神経細胞群の接合部における電位差の分布がスクリーンをつくる。中枢神経系で各スクリーンが合成され、認知されると考えられる。フーリエ解析による波動の分析が有効かもしれない。
- 3) フロイト（無意識）など。
- 4) 世親（阿頼耶識）、ユング（集会的無意識）など。
- 5) 世親の唯識説では、眼・耳・鼻・舌・身の前五識に対応する視・聴・嗅・味・触の五境がある。脳科学では、大脳新皮質に視覚野、聴覚野、味覚野、運動前野があり、旧皮質に嗅脳がある。
- 6) ヴィゴツキー（1974 訳）参照。
- 7) 乳幼児期には脳梁が形成されていないために、左右脳は未分化で、いわばイメージ脳として働く。児童期に脳梁が形成され、論理脳と感性脳に分化する。

- 8) ユング（1921）の 4 区分による。
- 9) 脳脊髄神経系では、神経細胞接合部で電位差が境界値（閾値）を越えると、逆説的強電位を生じて、イオン・チャンネルが開き、情報が伝達される。
- 10) 河原修一（2000）参照。

参考文献

- 1 ヴィゴツキー『思考と言語』
柴田義松訳（1974 訳）明治図書
- 2 プリプラム『脳の言語』（1971）
岩原信九郎ほか訳（1978 訳）誠信書房
- 3 ユング『タイプ論』（1921）
林道義訳（1987 訳）みすず書房
- 4 山本健一『脳とこころ』（1996）講談社
- 5 小野武年ほか『情動』（1994）岩波書店
- 6 岡本夏木『子どもとことば』（1982）岩波書店
- 7 太田久紀『仏教の深層心理』（1983）有斐閣
- 8 河原修一『日本語心象表現論』（2000）
おうふう
- 9 河原修一「現象の意味論から言語の意味論へ」
（2002）『金沢大学国語国文』27